

## 起床

杉山智哉

帰り道、道端に落ちていたあれは、  
誰かが大切にしていた何かに違いなく、  
それに目をやる時間を落として、  
夕暮れに、燃えたビルを思い出していた。  
浅く胡乱だ呼吸を吐き出し、  
誰かの手元を見つめながら、  
何かを考えている時間が、  
私をからっぽにしていく。  
気がつけば、思考はただ、  
俯瞰した誰かの視点になっていた。  
忘れようとしていた人の、  
温度のない肌に触れ、  
思い出せない記憶の底にある、  
色彩を持たない景色を、ただ、  
眺めているだけだった。  
雨の音も、新しい服も、あの人の顔も、  
水面に浮かぶ月も、冬の夜の匂いも、  
足りない感情を埋めるために、  
補うものを必死に探していた。  
胸の奥の奥にある、  
小さな塊は、  
誰にも取り除けなくて、  
気がつけば、  
深く憂いた呼吸の波は、  
時計の針の動きを真似ていた。